

九 戴冠式

たい

くわん

しき

行列は賑かに群集の間を縫つて進みました。笛や吹笛の奥床しい
音に導かれて、大勢な白衣の稚兒は、手にく樹木の枝を持ち、二
人の前驅が進んだあとに、衛兵の一隊は肅々としてその足並を揃へ
ました。制服の地方官についで、二人の式部官、つぎにブルゴン
ディ公爵は劔を持ち、デュノア伯爵は王節を持ち、その他の多勢な

貴族は、寶器ほうき或は供物くもつを持つて續きました。それぐの階級に渡つて徽章きしやうをつけた騎士の華かな装ひの後には、薰物くんぶつを持つた齊唱者さいしやうしや、香油かうゆの壺びんを持つた二人の僧正に、十字架像を持つた大僧正がつゞき、ジャンヌはその後うしろに、聖旗を携たづへて歩みました。その頭は、群集の注視ちゆうしを避さけるかのやうに、力なく前に垂たれてゐました。四人の男爵が支さへる天蓋てんがいの下に、衰龍せんりゆうの衣ころもを纏まとつたシャルルは、しづくと徒歩かちで續きました。澤山てうしんな朝臣は數歩を離れて進み、幾隊もの兵士は最後の殿しんがりをして行列は終りました。この時、兩側の群集は、雪な崩だれのやうにくづれて、押し合ひ揉もみあひ、行列のあとを追つて、ひしひしと寺院の前につめよせました。

行列がみな寺院のうちに入り終ると共に樂の音は止んで、嚴かな
戴冠の式は行はれようとしてゐました。

群集のうちに交つてゐた、ドムルミの村人と、ジャンヌの姉達は、
行列を見送つて、ほつとしたやうに各々の顔を見合せました。

『もし、ジャンヌを御覽なさいましたか。』

『あの、立派なみ旗を捧げて、王様の前を歩いて行つたのが、さう
でござつたらうが。』

『えゝゝ、さうでございました。』

『つい傍に、かうしてきやうだいがゐようとは、ちつとも氣がつか
なんだやうすでございました。どうしたことか頭を垂れて、顔色も

大さうわるいやうに見えましたが、わたしはなんだか氣にかゝつて、なりませぬ。

『この佛蘭西國中に名高い、あのオルレ안의少女せうじよといふのは、やつぱりわたしの妹いもうとのジャンヌでございました。』

『それにしても、お氣の毒なのはお父様とうさま、わたしども初め、みんなの人の喜びが、結句けつくお父様には嘆きの種たねなのですもの、あの子がだまつて家出をしてからといふものは、夢のことばかりお氣になされて、御心配のあまり、此頃はをかしなことばかり仰言おつしやつてゝございました。しかし、かうして一々その夢がほんとになつて來るのをみれば、わたしもなんだか氣になつてなりませぬ。お父様はつい此頃このころ

また、忌^{いま}はしい夢をごらんになつたといつて、一層氣を揉^もんでおいでのやうでございましたもの。』

村人の一人は、この時思ひ當^{あた}つたやうに胸を打つて、『わしはつい

今^がし方^た、小用^{こよう}を足すために皆の衆^{ちよつと}に一寸分れた時、人込みの中でひ

よつこり親爺^{おやぢさま}様に會ひましたわい。大そう顔色がわるかつたので、

どこか氣分でもおわるいかと聞きましたら、「ジャンヌが、ひどくも

のに恐れ居^をつた容子^{やうす}を見やつたか、いよく時は來た、我が子を救

ふべき時は來た。」というて、そのまゝ行かうとなさるから、わしは

吃驚^{びつくり}して、「はてどうなさるのぢや」といふたら、「何をどうといつ

て、あの子を神の方へ引き戻さずに置くものか。」と恐ろしく氣込^{きこ}ん

で居られますのぢや。わしは益々吃驚して、「娘御が身の破滅になるやうなことはなさりますな。」といふたら、「靈魂さへ救はれゝば、體からだなぞは死んでもかまわぬわい。」と捨臺辭すてざりふで、また人込みの中に潜くつて消えてしまはれました。」と物語つて、きよとりとしてゐるの
でございました。

『おゝ神様！ 何卒妹なにとぞの上をお護まもり下さいませ。またあの氣の毒な父を、何卒無事に村へおかへし下さいませ。』

『いやゝゝ、何もそんなに御心配なさることはござりますまい。この上もなく、神様に祝福されたジャンヌどのぢや。また親爺様にしても、娘御の不思議な出世に、嬉かうしさが嵩かさじて、少しのぼせておい

でなのぢや。今に氣も鎮しづまつて、落つきなされたら、自然とその嚙うは語ごともやみませうわい。』

『ほんに、それもさうでござんした。行列も残りなく見ましたから、早く村に歸つて、お母様にジャンヌのあの立派な容子を、お話しして聞かせませう。どんなにまあ、お母様はお喜びになることやら…………。』

『えゝ？ ではあの、妹いもうとにたつた一言も言葉を交かはさないで、もう歸らうと仰おつしや言いますのか？』

『その妹いもうとは、妹であつて、妹いもうとでないやうなもの、王様や皇子様方と、同じ身分に居る人だもの、ジャンヌの傍そばに近そばらうなどゝ、

もうそんな名譽心めいよしんは捨てなければなりません。』

『では、あのジャンヌは、わたし達だちを輕蔑けいべつするのでございませうか？』

『いや／＼、王様でさへ、我々に御挨拶ごあいさつをなさりますのに、ジャンヌどのが、どんなに高い位きづかにのぼつたとて、王様よりも一層上いっそうになる氣遣きづかひはござりますまい。ま、それよりも早く寺院に行つて、お即位式を見ようではござりませぬか。ぐ／＼してゐるうちに、もう濟すんでしまひませうわい。』

それらの人達は、連れだつて群集の中にまぎれ込んで行きました。即位式の終るのを待つて、寺院の前にうよく／＼としてゐた群集は、

今しも彼等の望んでゐた、その目的のものを所有することが出来ました。彼等は、ジャンヌの姿を認めるや否や、ひし／＼とその身のまはりにつめかけて、手を取つてそれを額にいたゞき、或はその着物せつぷんの裾に接吻をするのでございました。後あとから、前まへからも、横合よこあひから突然手をのばすのもあればして、一寸ちよつとでも、その體からだに手を觸ふれるのを光榮としてゐる人達によつて、ジャンヌは一足ひとあしも前に出ることが出来ませんでした。

ジャンヌの、自ら深く咎とがめる心は、なんとなくもの怖おぢをして居りましたので、卽位式の行はれる間、聖旗を捧げて、祭壇の近くに立つてゐなければならなかつたのは、この上もない苦痛なのでござ

いました。高く轟くとどろ風琴オルガンの響も、臆した心には、さながら雷鳴らいめいのやうに恐ろしく、廣い圓天井は頭の上に蔽おほひかぶさつて、壓おさへつけるやうな苦しさを感じられました。廣々とした青空のもとにでも出なければ、どうにも息がつかれないやうな胸苦しさが、人知れず旗を聖殿せいでんの奥深くにおいて、逃のがれるやうに、ジャンヌを寺院からぬけ出させました。

先程、行列に加はつて寺院に來る途中、群集まじの中に交つて、自分を見送つて居た、故郷こきやうの村の人達や姉達を、ジャンヌは夢のやうにおぼえてゐました。またそれは、心の迷ひであるやうな氣もしました。精神のぬけた體を、人々の爲すがまゝに委せて、ジャンヌは暫

く人波ひとなみの中に揉もまれてゐました。

『おゝジャンヌではないかい！』

それはたしかに聞き覚えおぼのある聲こゑでございました。はつとして振り向かうとする脇わきから、『おゝジャンヌ！』と、も一つの、親しい耳なに馴なれた聲が響ひびきました。

それは決して、幻影まぼろしでも迷まよひでもございませんでした。ジャンヌは確かに、二人の姉あねを目に前に見ました。

『おゝ！ やつぱりほんとうでございましたか。どうぞわたしを抱かかいて下さいませ！』

群集はやうやく、このはらからの再會さいくわいに敬意けいを表あらはして、ジャン

又の身のまはりに僅かな隙すきを作りました。

『おゝ、よくわたし達だちを忘れておくれでなかつた！』

『お姉様あねさま、ちい姉様ねえさま、わたしを可愛かあゆう思召して、はるぐ會あひに

來て下さいましたか。たゞの一言お別れの言葉ものべず、御心配を
残して家出したわたしを、あの、やつぱり可愛ゆう思召して下さい
ますか。』

『眼には見えないけれど、ありがたい神様の心が、わたし達をこ
こへ導いて下さいました。』

てがら
フランスごくちゆう

『お前の大した功は、佛蘭西國中にひろがつて、どこに行つても、
話といへばそのことばかり。お前をかうしてほんとに見るまでは、

嘘のやうな氣のした、そのお前の名譽を見ようと思つて、村の人だちと一緒にいっしょ出て來ました。そしてあのお父様も………。」

『えゝ？ お父様もおいでゝございましたか。どこにおいでゝございます？ なぜ隠れてかくいらつしやるのでございます？』

『お父様は、わたし達と一緒にいっしょではありませんなんだ。』

『御一緒ではございませんか？ そんならお父様は、わたしに逢はうとお思ひではないのでございますか？ あゝお父様、あなたは子供の喜びを、お考へなさらないのでございますか！』

『お父様は、わたしだちがこゝにゐることを、たしか御存じなさいますまい。』

『何故なぜでございます？ あなたは、大さう言ひ憎にくくさうにしておいでございしますが、どうかなされたのでございますか？』

『お前が家出をしてからといふものは……………』と言ひかける妹を姉あわは慌あわてゝ押へつけました。

『ま、何も彼も心配おしでない。ジャンヌの幸福しあはせなのをお聞きなされたら、さぞお父様とうさまもお喜びなさいませう。そしてまあ、お前もどんなにか嬉うれしからうねえ。』

『えゝゝ、うれしくなくてどうしませう。かうしてお姉様方あねさまたちにお目にかゝり、昔のやうにお話わをすることが出来るのでございますもの、あなた方のお聲を聞くにつけ、あの懐なつかしいドムルミの家が思ひ

出されてなりませぬ。あゝ、どんなにあの時分は楽しかつたでござ
いませう！ もう、もう、二度と再び、あんな楽しい思ひをするこ
とは出来ないでございますもの！』

はるかに、昔の羊の群でも思ひ泛べるやうに、ジャンヌはうつと
りとして、一つところを見つめてゐました。

『さあ皆さん、もつと近くへおいでなさいませ。妹はちつともたか
ぶりませぬ。一所に村にゐた頃よりも、もつとく優しいジャンヌ
でございます。』

遠巻きに立つてゐた村人は、おづ／＼とジャンヌの近くに寄つて
來ました。ジャンヌは、瞳を凝らして、その人達の顔を眺めました。

『あゝもし、わたしは何處どこに居るのでございませう？……………あゝ、みんな、みんな、夢であつたのでせうか？……………』

さうだ！ 夢でした。長い／＼夢でした。恐らくは、ツルイドの木蔭こかげに、野の疲れをやすめやうとして、やすらかな眠りをとつた、その夢であつたかも知れません。水車の響は一日中村の平和を唱うたひ、人の情なさけの豊かな、あのドムルミを捨てゝ、恐ろしい修羅の巷ちまたに、萬ばん軍を叱咤しつたし、劔つるぎを揮つて戦つたのは、今、目の前を横切つて行つた、長い／＼影法師に過ぎません。しかし、それはまあ、なんといふ明瞭きりとした夢であつたでございませう！

『もし、わたしはどうしてこんなところへ、このライムなどへ來た

のでございませう？』

『いゝえ、夢に見たばかりでなく、おまへは立派なにそれを爲し遂とげました。ジャンヌや、ようくあたりを御覽ごらん、輝かしい、立派な黄金こがねの甲冑かちゆうを、おまへは身につけておいでではないか。』

ジャンヌは、催眠術さいみんじゆつにかけられた人のやうに、言ふがまゝにその手を胸の上に置きました。身慄みぶるひが全身に傳つたはりました。

『夢とお思ひなのも尤もつともでござんす。おまへの功名は、わたし初め夢のやうに不思議なことなのだもの。』

『さ、皆様とご一緒に、はやくドムルミに歸りませう。』と、ジャンヌは、後から追ひたてるものでもあるやうに、言葉忙せはしくいひまし

た。『市民は、不相應にわたしを褒めてくれますけれど、わたしはほ
ら、子供同様なかわいもの、わたしを可愛がつては下されても、
あなた方は、決してそんな愚かな崇拜などはして下さいませぬ。』

この美しくもいかつい兜をぬぎ、鎧を棄てさへしたら、功名もない
代りには苦しい悩みもない、平和な昔の少女にかへられようも知れ
ぬ？ 美しい裝飾品はみな棄てよう、それは、温かな肉身の血に溶
け合はうとする心に、冷たい隔てとなるだけに過ぎないのだもの。
『わたしはもう、これからはどんな辛苦も艱難もいとひませぬ。一
生懸命よく働いて、身を高ぶつた今までの罪を償ふでございませ
う。さあ早く、私を懐しい父様母様のお家に連れて行つて下さいま

せ。』

ジャンヌは、丁度熱に浮かされた人のやうでございました。

群衆は今、朗かに起つた喇叭の聲に氣をとられました。

新たに王冠を戴いた國王シャルルは、アニエ・ゾレエを初め、數

多の貴族や廷臣騎士を従へて、その喜悅と希望に満ちた顔を、靜か

に寺院の前に現はしてゐました。群衆は、「國王陛下萬歲」を連呼し

ながら、ひし／＼とその周圍につめかけました。全土に響き渡れと

ばかり、透つた喇叭の音は人々の喧噪を統一して續きました。國王

の合圖と共に、祭儀官は柺棒をもつて靜まれの命令をしました。群

衆の喧噪はだん／＼と和いで行きました。

『汝等、我が忠愛なる臣民、朕は汝等が愛の念に向つて、深く感謝

す。朕が額に、神の置かせ給ふたこの王冠は、武勇勝れた朕が友の

劔によつて漸く得られ、貴き血潮に洗はれたのである。以後は、平

和のしるしであるところの、橄欖の枝をもつて飾るであらう。朕が

ために戦つた、武勇の士卒をして、朕が感謝を受けしめよ。又、敵

に味方をした者であると雖も、みな、赦しを與へるであらう。神は、

我が王國の危急の時にも、大御恵を垂れ給ふたのである。朕が即位

に際しての、第一の言葉も亦、その「仁恵」であるぞよ。』

群集は再び、「國王陛下シャルル萬歲」を連呼しました。

『朕は王位を、全智全能なる神の御手より受けたのである。』と、シ

ヤルルはジャンヌを指さされて、『そこに立てる少女こそは、汝等が
正しき君を扶けて、外國人の暴逆より免がれしめたる天の使者であ
る。少女が名は、この國の保護者、尊きヅニイにも等しいのである
ぞ、朕はその少女の名譽のために、祭壇を建てるであらう。』

「ジャンヌ萬歳」の聲は、潮の如く起りました。

『おゝジャンヌ、御身も亦我等同様、婦人によつて生れたのである
ならば、御身の幸ひを増すところの、その母の名を明かされい。も
しまた、御身は假りに此世の少女の姿をよさふ、尊き天のものであ
るならば、今こそその蔽ひをかなぐり捨てゝ、天國にあつて拜まれ
る如く、輝くみ姿を示させ給へ！ 朕は大地にひれ伏して、御身が

前に額ぬかづくであらう。』

群衆せいは制せいせられずに鳴なりを靜めて、みな一様やうにジャンヌの上に眼そいを注そいぎました。

『神よ！ わが父よ！』

鋭く胸を裂さいて出たその叫びが、人々の耳に消えて一瞬ちんもくの沈黙があつた時、黒く農夫の装よそはひをした一人の男が、つかくと群衆わを分けてジャンヌの前に出ました。

『おちゝ父ちだ、父ちだ！』と、思はず舉あげる人々の聲が耳にはひると、農夫は沈痛ちんつうな聲で口を開きました。

『はい、左様さやうでござりまする。彼女あれを生みました不幸な父でござり

まする、神様は私に、ジャンヌの罪を責めよと、お催促なされてござりました。』

この思ひもかけない言葉に驚かされた人々は、驚きのあまりに、たゞ無言であるより外はありませんでした。

『かう申上げましては、恐れ多いこととござりますが、陛下には、神様のお力によつて、お救はれなされたことゝ、御信じてござりまするか。いやゝ、陛下には、たぶらかされておいでゝござりまする。その外の皆様方もさうでござりまする。貴方様方は、魔法によつて救はれたのでござりまする。』

『狂人だ！ 狂人だ。つかみ出せ！』と騒ぐ聲が群衆のうちから起

りました。

『いゝや、このおやぢは決して、氣が狂つて居るのでも、亂心らんしんをし
て居るをのでもござりませぬ。その証據しやうこを今御覽ごらんに入れます。さ、
あなたさまがたあなたさまがた だぶ
貴方様方を誑たぶらかした彼女が、このおやぢの目の前で、魔法を使ふ
ことが出来ますかどうか。……………こりやジャンヌ、尊い神の御名おんな
によつて、おまへは淨きよい者であるか？』

不安な沈黙が人々を支配しました。ジャンヌは、身動きもせずつ
つ立つて、永久に口を開くよしもない、大理石の彫刻てうこくのやうでござ
いました。

『おゝ、黙つてゐる！』

『さ、これでも彼女はあれ淨きよいものでござりませうか？ あの呪のろはれた
ツルイドの樹陰こかげには、昔から悪い精靈せいれいが住んで居ると、言つたひ傳へら
れて居りまするのに、うか／＼そこに立ち寄よつて魅みいられた娘は、
あだな名譽に憧あこがれて、不朽ふきうな人間の靈と、惡魔の術とを交換したの
でござりまする。』

なんといふそれは恐ろしい言葉でございましたでせう。現在う生まみ
の娘をおとし陥いれる証據は現はされました。よし、たとひ親爺を狂人ちんもくに
してしまつたところで、ジャンヌの沈黙ちんもくはどうすることも出来ない
事實じじつでございました。けれども人々はまだ半信半疑はんしんはんぎでございました。
殊ことにアニエ・ゾレエをはじめ、デュノアやラ・ヒールは、ジャンヌ

を信ずることが深かつたので、さまざまになだめて、ジャンヌに口を開かせようとなりました。あまりに強く驚かされた爲めに、一時のさうした發作になつたのだらうとも思ひました。罪のないものは、自ら言ひ解く言葉を持つてゐる筈、早くこの忌はしい誹謗から免れるやうにと、我事のやうに氣を揉んで、人々はジャンヌの口の開かれるのを待ちました。

けれども、人々のその希望にそむいて、ジャンヌの口はいつまでも結ばれたまゝでありました。群集は騒ぎたちました。

『やあ静まら^{しづ}ない、少女の清淨潔白なのは、わしが名譽を賭けて誓ひ申さう。何處の誰れであらうと、もしも少女に罪を被せられる

なら、わしがお對手あいてになるであらう。』と、氣早きばやのデユノア伯は高く
呼ばはつていきまきました。この時、不思議にも晴れ渡つた空の一
隅ぐうに恐ろしい雷鳴が起りました。色いろを失なつた人々の目を射いる電光
は、譬たとへやうもない素早さをもつて人々を恐怖に導きました。

『さ、今雷鳴を轟とどろかせられた、御神おんかみかけて返事せい、罪なきものと
言うて見い、穢けがれぬものと言うて見い!』

父親の言葉はより一層烈しい雷鳴によつて打消されました。群集
はちりぐに逃げ出さうとして、混雜きたを來しました。

大僧正は進み出て、『神の御名によつて御身に問はう。果して罪は
ないか、どうぢや。もし、この雷鳴が、御身むじつの冤を告げようための

ものであつたなら、この十字架じふじかに觸ふれて、人々に證據あかしを示されい！』
ジャンヌは猶もくも黙もくして居ゐました。

人々はその恐ろしい結末に戦きながら、そこを立ち去るより外は
ありませんでした。

潮うしほの去つたあとのやうなもの侘わびしい路傍わきに、たゞ一人茫然ぼうぜんと残さ
れたジャンヌは、烈はげしい雷鳴の中に立つた銅像のやうでございまし
た。

【入力者注】（頁・行は底本のもの）

185-10 はらからの再會に ↓ はらからの再會に

187-2 一諸に出て來ました。 ↓ 一緒に出て來ました。

187-5 わたし達と一諸では ↓ わたし達と一緒では

187-6 『御一諸ではございません ↓ 『御一緒ではございません

191-9 皆様とご一諸に、 ↓ 皆様とご一緒に、

193-9 合圖と兵に、 ↓ 合圖と共に、

公開：令和三(2021)年九月六日

改訂：令和五(2023)年三月七日